苺キャンディーと学級委員

大河内一滴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
苺キャンディーと学級委員

【Ｎコード】
Ｎ５８３６Ｋ

【作者名】
大河内一滴

【あらすじ】
この物語は「僕」を中心とした学園生活による、ほのぼのとしたストーリ？、ハートフルなラブストーリー？、スリルあふれる冒険？、などが書かれていくのだと思います。

序

僕の頭の中にある一番古い記憶には、母親のこんなセリフから始まる。

「どう？おいしい？」

ようやく物心がつきはじめた当時の僕は、今では理解できる母さんの言葉に戸惑いながらも、精一杯口の中にあるガラスのようなものを動かしながら伝えるべき言葉を探したのだと思う。

「うん、おいしいよ」

その瞬間、周りの景色が光輝いて見えた

なんていうとロマンチストみたいだけど、そう表現してもいいくらい母さんの笑顔はまぶしかった。これが当然ながら僕の記憶の中では始めてみる笑顔になる。

（そうか、こう言えばいいのか）

母さんの笑顔を見た僕は戸惑いながらもこんなことを考えていたのだ。

その時から僕のプロフィールの「好きな食べ物」の欄には大抵「苺キャンディー」と書かれている。

よく、校長の話は長くてだるいとか入学式なんてのは形式だけで中身がなくつまんないなどの話を聞くことが多い。けど、直前に入学式を終えた僕の感想としては校長の話はそれなりに楽しめたし、これからの学校生活に対しての引き締めにもなったと思う。また入学式の形式ばった雰囲気も厳かできらびやかだった。

しかし、そう思えるのも入学式の間僕が緊張をしていたからであって、僕は入学式の間中これから毎日通うことになる校舎、毎日着ることになるこの制服、どんなクラスになるのか、どんな友達とどんな日常を繰り広げるのか、最後にちょびっとだけ勉強のことなどを考えつつこれからの高校生活を楽しみにしていたのだ。

入学式が終わり、クラス発表やオリエンテーションといった行事もつつがなく終了した教室では、はしゃぐ奴ら、同じクラスだったことを喜ぶ女の子達、早々に帰る人達などで騒然としていた。

僕は同じ中学だった奴らと少しだけ話をして、帰りに家族で一緒に昼ごはんを食べる約束をしていたことを思い出し教室を後にした。

（母さんは学校から少し離れたところにある公園の駐車場で待っていると言っていたっけ）

これからどんな学校生活が始まるのだろうかと期待と不安が混じったような変な気持ちを味わいつつ、僕は家族が待っている公園へ

向けて歩き出した。

左ポケットにあった苺キャンディーの包み紙をあけ

口の中に放り込んだ

序（後書き）

かなり見切り発進、これから動いていくんだと思います。

その1

春の暖かな空気はそこら中に漂っていて、そのせいか桜の花は未だに散ることもなく咲き誇っている。まぁ桜が散っていないのはここ最近雨が降っていないからで、特別な行事や記念日には大抵雨が降るものだ、と思っていた小学生以降の僕の主観は少し訂正する必要があるのかもしれない。

あたたかな空気なのだから人も穏やかになるかというとそうでもなく、世間では大学の進学率と新卒者の就職率が騒がれ、ニュースでは政府の支持率が騒がれ、新聞では連続殺人事件の続報がトップをにぎわっている。そんなことを考えている僕の周りでも入学式から今日までの1週間はけしてのんびりとしたものではなく、わりとあわただしいものだった。

「お兄ちゃん！早く降りてこないと私もう行くよ！」

あわただしいのは妹のほうもらしく、今年中学生になったはずの妹は階段の下からまだ子どもっぽい感じの声で僕に怒鳴ってきた。

「ちょっと待ってアーちゃん！すぐ降りるから！」

時計を見るとあわただしくなるのも納得の時間で、僕は急いでカバンを持ち階段を駆け下りた。もちろん忘れることなく机の上にあるキャンディーボックスから飴を10こぐらい掴み左ポケットに入れる。

「もう！何のんびりしてるの！もう電車が出ちゃうよ！」

いやーこの暖かな空気には人をのんびりさせる成分が含まれているのではないかという考察にふけっていてね。たまには春の暖かな日差しでも浴びてのんびりしたらどうだいアーちゃん、そうすればその子どもっぽい態度も少しは大人っぽくなるんじゃないかな。

「何意味わからないことつぶやいてるの！それに私はまだ子どもなんですー！」
玄関で妹に急かされつつ急いで靴に履き替え家を出る。ちなみに余談だけど妹にはアーちゃんと呼ばないと怒って無視されてしまうから僕達の会話の中では「お兄ちゃん」と「アーちゃん」なのである。お兄ちゃんとしては恥ずかしい呼び方だが妹のためだからしょうがない。
「あ、アーちゃんちょっと待って」
今にも走り出そうとする妹に静止を呼びかけつつ、僕はいつもの日課どおり左ポケットから飴玉を一つ取り出し、口の中に放り込んだ。

うん、レモン味。

正確にいうと水飴と砂糖とレモンの味だ。

「もう、そんなことしてる時間ないって！駅まで走るよお兄ちゃん！」
妹に引っ張られつつ僕等は駅に向かって走っていった、そのおかげで何とか電車には間に合った。しかし妹よ、別に時間ギリギリというわけではないのだから例え間に合わなくても、次の電車を待てばいいんじゃないのかな。まぁ次の電車が車での３０分をホームで待つのは僕だって嫌だけど。
電車はこの駅が始発なので比較的にすいており、僕と妹は二人用の席に並んで座った。妹のほうが降りる駅が近いため、妹が通路側で僕が窓側だ。
「それにしてもお兄ちゃん飴大好きだねー」
座席に座るなり妹は飴玉を口で動かしている僕をしげしげと見ながらいった。
「いやー、もう癖になっちゃっててさ、口に何か入れてないとむず

むずするんだよね」
　別に飴が好きなわけじゃないけど、っていうかアーちゃんは知っているだろ。
「うわ…飴ジャンキーじゃん、…キャンディージャンキーのほうがいいかな。…まぁ知ってるけどさ、そ　んなに食べてちゃ虫歯になるよお兄ちゃん。あと糖尿病！」
「失礼な！ちゃんと朝昼晩歯磨きはしています！最近は糖質控えめの飴だって買ってるし」
　妹は僕が今一番気にしていることを攻撃しだした。
「でも消費量が桁違いじゃん、絶対将来デブになってるよ…って昼間学校で歯磨きしてるの！？」
　えっ、普通だろ？
「女の子みたい…まぁお兄ちゃん外見は中性的だからギリセーフか…あっもう私が降りる駅の近くだからドアまでいってるね！飴玉もほどほどにねお兄ちゃん！いってきまーす！」
「いってらっしゃいアーちゃん」
　一通り僕をいじり終わりアーちゃんはドアのほうへ向かっていった。僕は妹に言われたことにへこみつつ、降りる駅が近づくまでの間ウォークマンを取り出し音楽を聴き続けた。

その1（後書き）

まだまだプロローグみたいな感じです。主人公の名前は次くらいに出ると思います。話が進んでいったらあらすじもちゃんとしたものになると思います。

その2

「お、キャンディー王子、今日も早いな」
席に座り込むなり隣の席の竹田が話しかけてきた。
「だからキャンディー王子はやめてくれっていってるだろ」
非常に不愉快なニックネームだ。
「キャンディー黒沢よりましだろ」
確かにそんな売れない芸人のような名前なんかより幾分かましだけど、どっちにしろキャンディーがつくから嫌だ。
「しょうがないだろ、あの自己紹介じゃそう呼ばれても文句はないだろ」
竹田は笑いながらそう言った。

そう、入学式の次の日に行われた自己紹介によって僕の変な知名度がクラス全体に広まってしまったのだ。

～以下回想～

「では出席番号順に自己紹介をしてください」

担任の木村先生の言葉から始まった自己紹介はついに僕の隣の列になっていた。ほかの人の自己紹介を聞いている間、僕は高校生になっても自己紹介というものがあるものなのだという退屈な感想にふけっていた。所詮、自己紹介なんてものによって人の本質を見分けることはできないし、小学校や中学校でもそうだったがまじめに聞いているのは最初の１０人くらいで、あと覚えているのは気になった女の子や

「竹田康介１５歳！あだ名はジョジョ！宇宙人と超能力者と未来人

がいたら俺のところに来い！終了！」

…こういったウケ狙いきたバカの面だけだ。

つーか年を言う必要はねーよ！

そしてお前の名前のどこにもジョはついてねーよ！

異世界人はどうした！

中途半端にしか読んでないならネタにするな、以上！

ツッコムところしかない竹田の自己紹介は、それでも皆にうけることなく、クラス全体が微妙な雰囲気のまま次の人の自己紹介へと移った。…うん、こいつにあだ名なんていらない。竹田で十分だ。

さて、なぜこういった自己紹介が全員分まじめに聞く気になれないか、という理由の一つに自分も自己紹介をしなければならないという問題がある。こういった自己紹介は自分の番が回ってくるまで、どういった自己紹介をすればいいかという疑念に囚われ、自分の前の人の自己紹介などに耳を傾ける時間はないのだ。前項で述べた通りたかが自己紹介であってその人の本質がわかるわけではないのだが。されども自己紹介、変なことを言えばこの先1年間、修復不可能な関係を築くことになってしまうのも事実。

しかし結局のところ、こうやっていろいろ考えているうちに今の僕の状況のように、僕の列の3番目の人の自己紹介までが終わり、次の次は僕の番という自体に陥り、あせってしまって当たり障りのない自己紹介をしてしまうものなのだ。

さて、僕はどういった自己紹介をしよう。

といっても結局のところ当たり障りのない自己紹介をするのだから使う言葉は限られている。「好きな食べ物」「特技」「趣味」「

中学にやっていた部活」オーソドックス（こんな時に使う言葉だったか？）な自己紹介といえば大体このような項目だろう。そのうち僕は中学は帰宅部だったので最後の項目は削除するとして、残りの項目をつなげて言えばいい。

僕の順番が来て。

僕は席を立った。

「僕は黒沢大事（くろさわだいじ）です。好きな食べ物は苺キャンディーで趣味は飴をなめること。特技は他人に味を伝えることができます。ちなみに今はメロンキャンディーを食べてます。」

あれ？

（……間がやけに長い……おかしなことを言ったか？）

必死に今自分が言ったことを思い出していると。

「おまえキャンディーのことしか言ってねぇじゃねえか！」

竹田にツッコまれた。

「好きな食べ物が苺キャンディーってちょーウケルんですけど！」

「っていうか味を他人に伝えるって誰にでもできるし！」

「ダイジじゃなくてキャンディー王子じゃん！」

皆が一斉に僕の発言にツッコミをいれ、教室が笑いの渦で騒がしくなる中僕は恥ずかしさに耐え切れずうつむいてしまった。事態を収拾するために木村先生はコホンと咳払いして。

「皆さん、次の方の自己紹介があるから静かにしましょうね。それと黒沢君、授業中は飴をなめないようにしようね」

とどめのセリフをはいた。

クラスの連中は全員この言葉を聞いて大爆笑。結局次の人の自己紹介が始まったのに１０分以上の時間を費やすこととなった。その上、中には自分の自己紹介の番が回ってくるまで机に突っ伏して笑いをこらえている人だっていた。

いったい何がそこまで面白いんだ！

そうして僕は晴れて「キャンディー王子」とクラスで認知されることとなった。

～回想終了～

その2（後書き）

うーん、なかなか表現したいことが書けない。
今回主人公の名前がようやく出ました。あと、一応今後に向けた重要なワードもちらほら出ているのではないかと。
それにしてもキャンディー押し出しすぎだし、文章も微妙だー

感想とかこういう風に書いたらいいよといったアドバイスがあればどんどん言ってください。

その3

「それにしても面白かったよな王子は」竹田はニヤニヤした顔で僕のほうを見る。
「王子って短縮するなよ気持ち悪い」
あとそのにやけた顔も非常に気持ち悪い。
「キャンディーつけるのめんどくさいじゃん。お前の席の隣に座ってる水鳥さんなんて自分の自己紹介の間も笑ってたんだぜ？」キャンディーを削除してしまったら本末転倒な気がするのだが。竹田は僕のこのあだ名が気に入ったようでなかなか変えてくれない。たぶん一生変わらないだろう。
そう、回想でもチラッと出てきたように僕の隣の席に座っていた女の子は、自分の自己紹介の番がくるまで机につっぷしたまま笑いをこらえていた。

「くっくっ……すまない、先ほどのの黒沢君の自己紹介からぷっ……笑いが止まらないのだ。ふふっ……私は水鳥京子（みずとりきょうこ）という。それ以上の情報は後々話せばわかってもらえるだろうぷっ……以上だ。」
水島さんの自己紹介は余計なものは一切なく、でもその端正な姿勢と透き通り響き渡る声、あっさりとした内容からは名前以外の情報もふんだんに含まれていた。ひとことで言えば水島さんはとてもかっこよかったのだ。……ふきだしたりしなければ。
困ったのは僕のほうだ。せっかく僕の自己紹介以降落ち着いてきていた雰囲気が水島さんの自己紹介によって僕がまた変な形で注目されてしまったのだ。恥ずかしいったらありゃしない。
「しかしお前もたいしたやつだよ。俺ほどじゃないがもうクラスの注目の一人だぜ」竹田のスベらざるをえないセリフを否定したい（あとツッコんでやりたい）のもやまやまだがあの自己紹介以降クラスのほとんどの奴らに質問攻めにあったのも確かなのだ。まったく

落ち着いて飴をなめる暇もない。
「はぁ…それにしてもどうにかならないかなぁ…『ハッカキャンディーってどんな味なの？』て水飴と砂糖とハッカ結晶の味に決まってるじゃん」
「どうにもならないな。お前はもうキャンディー王子として北二校の飴文化を守り続けていく使命を果たすしかない」
「変なキャラ設定を付け足すな竹田。第一苺キャンディーだってそんなに好きなわけじゃないし、1週間に8回口にするかどうかだよ」
「それだけ食えば十分だと思うぞ、俺は。それに苺キャンディーはおいしいとも思う、俺は」
「おいしい何てわかんねぇよ。ただ口に含んでるだけだし」
「何だそれ？…っともうすぐホームルームが始まるみたいだな。口の中にある飴を早く飲み込んだほうがいいぞ」
竹田は机の上にあるカバンを片付けながら言った。前を見ると確かに木村先生が教室に入ってホームルームの準備をしだした。ちなみに自己紹介以降、木村先生と目が合うたびに口の中を確認される「木村チェック」は未だに継続されている。本当に恥ずかしい。……まぁ木村先生は口で叱ってくれるだけなのでそこはありがたいのだが。つくづく飴をなめる暇さえないというものだ。
「ちなみに今日は何キャンディーなんだ？」「ミルク」
「おいしいか？」「牛乳と砂糖とあと水飴の味」
そういって、僕は飴玉を噛み砕き、飲み込んだ。

その3（後書き）

ちょっとずつ文体を変えていければと思います。
もう少し長めにかければいいのですが語彙力がないです。

その4

「皆さん、1週間たってお互いのことを分かってきたと思います。そこで今日のホームルームでは学級委員とその他の委員を決めていきたいと思います」木村先生のそんな一言から今日のホームルームは始まった。

学級委員…主に授業開始時や終了時に「起立」「礼」などの号令をかける人物。また、ホームルームでは先生の代わりに進行役をしたり、学校全体の行事などではクラスごとの行動になるのでそのための指揮をしたりすることもある。その役柄により、だいたいの場面でクラスの中心的存在になり知名度は格段に上がる。主にクラスで優秀な成績を修める者がなる場合が多い。しかし、高校1年など初めてのクラスでは個人のおよその成績がつかめないため成績以外の何かを判断基準にして学級委員を選ばなければならない。

「ではまず立候補する人はいますか？」木村先生はさらに言葉を続ける。

しかし、当然のことながら誰も手を挙げることはしない。そう、当然だ。誰だって苦労の多い役割は受け持ちたくない。学級委員になれば放課後はもちろん、朝だって何らかの仕事によって拘束されることは多いし、週に1回は委員会に参加する必要がある。また、クラスで何か問題が起きればまず学級委員が解決を図らないといけない、クラスの人を注意することもある。だれだって中心の周りにはいたいけど、自ら中心にはなりたくないのだ。

「誰も立候補するひとはいないの？じゃあ誰かの推薦にするけど良い？」

そして立候補する人がいなかった場合、大抵穏便に解決するために推薦という方法が取られる。しかしこの方法も高校に入ってすぐのこのクラスでは問題だ。まず圧倒的にクラスの全員の名前を覚えていないしそうなると必然的に覚えているやつの中から選ばざるを

得ないのだ。となると最初の自己紹介で失敗をしてしまった僕には本命の丸印がついてしまう。というかそうなった場合竹田が絶対に僕の名前を出すに違いない。誰か助けてくれ！

教室に早くこの場を終えたいという感情が渦巻いてくる。皆誰かが立候補をしてくれるのを待つしかない。そのとき

「誰も立候補する人がいないのなら私がなろう」

僕の隣に座っている水鳥さんは手をまっすぐに挙げて、発言した。

「そっそう、では学級委員は水鳥さんに頼むことにしましょう」

すこし間があいて木村先生は言った。その瞬間クラスに蔓延していた嫌な空気はさっと晴れて、皆安堵の息を吐いた。

水鳥さんはこういった皆が困っている事態をほっとくことはできない性格なのだろう。僕は木村先生にばれないように飴を口に含みつつそんなことを考えていた。入学式からかれこれ一週間くらい水鳥さんの隣の席に座っているが、彼女はプリント配布や先生への連絡等の他の人がおよそやりたがらないような仕事も率先して……というかやりたい、やりたくないという感情なんてまったく気にせず動いてしまうようなのだ。まぁその場面を見かけてしまうことが何度かあり、僕もその仕事を手伝ったりするはめになってしまったのだが……。

しかも、水鳥さんが仕事を率先してやってくれるおかげでまるで、誰もしなくても最終的に水鳥さんがやってくれるんじゃないかといった考えが皆にあるかのように（実際にあるのだろうけど）クラスの雰囲気はよくなるのだ。もしこれで水鳥さんが嫌々しているのなら、僕は怒ってしまうところだろうけど、それ以前に彼女はそんなことを気にしていないので僕としてもやっぱり最終的に彼女がしてくれるだろうと安心してしまうのだ。そしてそんな彼女を単純にすごいと思ってしまう。

とにかくこれで学級委員は決まり後は他の委員を決めれば今日の

ホームルームは終わり。あとはいつもの日常が始まるだけだ。
「あっ、学級委員は2名必要だからあと1人決めないといけないの」どうやらいつもの日常はまだ始まらないらしい。クラス全体から「えー」という声が聞こえた気がした。というかたぶん何人かは実際に言ったみたいだ。
「先生、他に立候補する人がいないようなら私が推薦したい人が1人いるのだが」
「そうなの？じゃあもう立候補もいないようだし水鳥さんが推薦した人にやってもらうことにします」
　互いに誰が誰を推薦するかで膠着状態のクラスのためにまた彼女が推薦してくれるというのだ。もうすでに今日だけでこのクラスは彼女に2回救われているようなものだ（言いすぎか）。さてそういうことならもう余計なことを考えずに彼女が誰を推薦するのか聞いてみよう。クラス中が彼女が誰を言うのか気になる中、彼女はいつもの綺麗な声で言った。
「私は黒沢クンが適任だと思う」

その４（後書き）

忙しくて時間があいてしまった。
あともう少しで核になる話にいくと思います。

その5

「」

あまりの驚きに口の中のキャンディーが飛び出そうになった。そうなったら今度こそ木村先生に飴を没収されてしまう。

「俺も王子が適任だと思います！クラスの人気者で真面目で仕事を何でもこなせます」

竹田がさらなる追い討ちをかけてきた。しかもしてやったりみたいな顔をしてるし、あとで顔面グーパン決定だな。こっち見てウインクするんじゃない！気持ち悪い。

「では黒沢くんに学級委員をやってもらうということで皆さんよろしいですか？」

木村先生の言葉に無常にもクラス全体から拍手の音が聞こえてくる。基本的に自分以外の誰かがやってくれればそれは誰だっていいのだ。拍手くらいなら皆するさ。

「黒沢くんお願いね」

「…はい」

これで正式に僕が学級委員になることが決まってしまった。まぁしょうがない、そういうこともあるさ。どうせ夏休みまでの辛抱だ。2学期にはまた違う人が学級委員をするに決まっている。所詮学級委員なんてものはクラスをちょっとだけクラスらしくする飾りみたいなものだ。長い人生の中で高校1年のときの学級委員は〇〇君だったなんて覚えているやつはまずいないだろうし、下手したら自分ですら学級委員をしたことを忘れているかもしれない。ましてや一緒に学級委員をしたやつのことなんて眼中にないだろう。……そのころには水鳥さんも僕を学級委員として推薦したことなんて忘れているんだろうな。

ん？何で水鳥さんは僕を学級委員として選んだのだろう？隣の席

ではあるけど朝夕の挨拶程度にしか話したことはないし、水鳥さんならこういうときに推薦できる友達は少なくないはずだ。疑問に思った僕は水鳥さんの顔をうかがってみることにした。
水鳥さんも僕の顔を見ていた。その整った顔立ちを若干はにかむように笑いながら、小さな声とともに「ありがとう」と口を動かした。

僕はその瞬間ちょっとだけ彼女の顔に釘付けになった。なんだか分からない攻撃をくらったみたいに顔が火照ってきて汗が噴出してきたので彼女に何の返事もせずに前を向いてしまったのだった。

「では二人とも前に出てきて挨拶をしてください」
木村先生の言葉にあわてて飴玉を飲み込む僕よりも一足速く隣の席は動き出し、彼女は席の間を進み教壇にさしかかる直前で盛大に転んだ。

ズッテーン

音に表わしたらこんな感じだ。
それはもう盛大なこけ方だった。
もとからうるさくはないクラスだったが、一瞬シーンとして、一瞬ざわっとして、またシーンと静かになった。
「えっ！えっ？」
僕は何がなんだかわからなくなったがとりあえず水鳥さんを抱え起こした。僕より背の高い彼女は一瞬ふらついたけどすんなり立って無言で教壇の前に立った。僕はちょっとビビリながらもその横に立つことにした。
水鳥さんはいったん周りを見渡してから静かに話し出した。
「私が学級委員になったからにはこのクラスをちゃんとまとまりのある良いクラスにしたいと思う。以上」

あまりにも簡素で率直な挨拶はみんなの心にどう届いたのか、ちょっと間をおいて拍手が起こった。僕はその隣でしどろもどろになりながら「1学期の間、頑張りますのでよろしくお願いします」と小さい声を出すのが精一杯だった。

その５（後書き）

ものすごく時間がかかりました。
区切りよく書くことより休まず続けられるように頑張ります。

その6

学級委員が決まれば他の役員を決めることになる。僕と水鳥さんにとっての初仕事は他の役員を決めるための進行役だった。他の役員も人気の差があり、たとえば図書委員、保険委員などは普段学生が使わない場所での仕事だったりするので人気が高いし、美化委員、風紀委員などは地味で仕事が多いため人気は低い。僕はもちろん楽で目立たない福祉委員を狙う予定であったのだが、こうなってしまった以上初めてでなれない司会をこなすしかなかった。

僕と水鳥さんのコンビでする進行はまったく打ち合わせも何もしていなかったのに必然と水鳥さんが司会をして僕がそれを黒板に書き写すことになった。さすがに水鳥さんはこういった役になれているのかテキパキと司会をこなし、先ほどずっこけたこともまったく気にしてないようである。こうして即席のコンビであったがスムーズに最初の大役をこなしたのだった。

「それでは役員もきまったのでホームルームを終わります。号令よろしくね」

木村先生の一言で水鳥さんがキレイな声で「起立、気をつけ、礼」を言いその日のホームルームは終わった。

「黒沢くん、さっきはありがとう」

ホームルームが終わったあと隣の席にいた水鳥さんがこちらを向いて言った。

「黒沢くんが引き受けてくれたおかげでスムーズにできたよ。」

いや、あの場合引き受けられないでいることの方が難しいし、勇気がいるのだがそんなことを彼女に言うわけにもいかないし、必要とされるのは悪い気はしない。人間は誰だって必要としてくれる人にはやさしいものなのだ。ボクだって

でも水鳥さんはなんでボクを指名したのだろう。仲の良い友達ならいくらでもいるだろうし、僕より学級委員に適任な人なんて5万といわず5億はいるだろう。つまりこの学級にだって3人はいるはずだ。そう思ったので口に出してみた。

「あの、水鳥さんはどうして僕を推薦したの？僕より学級委員にふさわしい人は友達にいるでしょ？」

こんな質問をすると学級委員をしたくないと思われるだろうが、実際にしたくないけど。しかし水鳥さんはそんな僕の質問に少し間をおいて、全ての問いに完膚なきまでに答えてくれた。

「そうだな、まず最初にもう一人の学級委員を選ぶにあたって、同姓ではなく異性のほうがクラスのバランスが取れてよいだろうと思った。なので男子から選ぶことにした。次に私は友達は多いほうであると思っているが、異性の友達はさすがに数えるほどしかいないし、その上できたばかりのこのクラスには同じ中学だった男子はいない。そして黒沢クンがふさわしくないかどうかについては私は君はとてもふさわしい人間だと思う。それは私と一緒に仕事を手伝ってくれたりしたことからも分かる。」

うん、水鳥さんの長いお言葉に僕はただただ照れるのを我慢するしかない。不思議なことに水鳥さんに説明されると自分のことなのに自分はやればできるのではないかと思ってくる。コレが洗脳というものなら僕はもう十分にかかっていることだろう。

水鳥さんはまた少し間を空けていった。

「最後に君がどう思っているか分からないが私はもう黒沢クンとはかけがえのない友達だと思っている。だから私は学級委員にふさわしい人を友達の中から選んだつもりだよ」

そしてにっこりと微笑んだ。

その笑顔はとても柔らかで、優しさにあふれていて、何より可愛かった。おそらく僕が今まで生きてきた中でこんなにびっくりするような笑顔を見たのは、お母さんか水鳥さんかお釈迦様くらいなも

のだろう。
びっくりした。
なんだかびっくりしまくった。
「い、いやそんなにまで言ってくれるんなら――その、引き受けてよかったと思うよ、水鳥さん」
しどろもどろになりながらも自分の気持ちを素直に表現してみた。今の僕なら学級委員もとりあえずやってみても面白いかなと思えてくる。よく考えればどのみち何らかの委員会で働かないといけないのだ。なら人に頼られるほうがいい。
うん。
水鳥さんはうなずいて少し真面目な顔にもどして口を開いた。
「あとついでに言っておきたいのだが。私はできれば友達には下の名前で呼んでもらいたい。だからできれば下の名前で呼んでもらえないだろか？その代わりといっては何だが、私は君の事をこれから大事君と呼ぼう」
「え？あ、はい。っと……京子、さん」
「うん、契約成立だ」
といった感じでホームルームが終わった後。僕と京子さんの中で友達と学級委員契約が成立されたのだった。

その６（後書き）

放置しすぎました。
ゆっくりと書くので気長にお待ちください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5836k/

苺キャンディーと学級委員

2010年12月20日14時48分発行